雲玉集

十二之

歌

伊地知文庫
文庫20
280
4

文庫 20 280 4

雪玉集巻第十

百首 定家 寄月述懐 定家卿二条院御時物名百首

春二十首

伊地知氏書册

門舎人海門清 実陰ノ弟名

歌

秋二十首

恋十首

鳥之

祝之

百首和歌　田應　年廿六

壽二十之

関路早春

寒月のみちもさやかにくもらぬ世の秋ぞ幾夜ともなく

湖上納涼

あらはらふ秋の風ぞと涼しさも民のやとりの夏の夜ふかき

籬中菊當
當春而植秋而花冬而枯
薄家竹當
夏而茂冬而枯
田邊若菜
野外雜草
山路梅花
樹意疎

秋二十首

初秋朝風

萩をまをとゝのほやいとゝむ袖ひあるこひとりあれのそらを

閑月七夕

あとはらへ八かの月とあるやうにあまをあかつきあと

野亭夕萩

咲そ紀のあふさかやまをかけてくれなゐ

江邊曉萩

舟人のこゝろもや神そへんにほてるあさ萩の末をよ

山家初鴈

秋ふをまつやねりこのあきをもむこゑをとくく

海上待月

月をそきうら風さひしくあまを小舟をよそにみてとまる

松夏夜月

雲風のうたたねおとろかれぬ月のうつろふそのまくら

深山見月

ふかくわけ入ものとてあらしやまいくへの月をやとしぬらん

草露映月

露そおくまかきをとふ人もなし月のみやどる庭の秋風

関路惜月

夏もなおかねの関路の月をしみてやとにとまるらん

慶安秋友

法ときこゆる麻をこゝろにそめてきる袖の色さへ濁りあるへき

田家擣衣

さとあれて軒ハあらしもふきとをす小田の庵のきぬたしきりに

古寺秋雪

誰とめてきりかけそめし跡ならん深くもつもる峰の松風

秋風波聲

絶もあらハ秋の聲ふもとをはらふ夜半の嵐に

雁下沙汀

あれまくとたゝ松風のこゑのみや霜夜の月にかりのなくらん

和歌浦

あしへこぐ舟のかいのあとをとめてなをもすみよき浦のしるしに

湖上夕雪
寒夜灯
歳暮洞房
新年山家
恋
初逢恋
恋旧
祝言
恋
思親昭恋
初不逢恋
松竹
梅有喜恋
祝言恋
恋歌暁恋
後朝恋
暁雪
恋
祝言

遇不逢恋
一すぢもあるわづらひくさぐさそ身年月
契経年恋
月日やへ人をかぞふる数よりも
数去恨恋
うらみやこゝろ思ひ知らすよ
逢事増恋
なやましたくかゝる夕べの一年を
被歎賤恋
うき月をこゝろ波をとゝめかね
金牛契恋

をくるまもうき夕べのとりの鳴初夕雪の
隠門帰恋
人そうき世のうき夫ハなるうき
忘住恋
いふをしあくふ事もなよ数へ行年を人はたゞ
依恋祈神
あら社なくいのる契りを神もしるらん
海遠路恋
立ちひくゝひの雲ハうきらよこゝろ
偕人名恋
をうためをうきやうや我ものみなかりふ人のちひくをとむ

絶不知恋

あしひきの山たちこえてこころまた
ゆきてもゆきても山また山

寄假名恋

假名とも世のことわりや仮の世に
まことの人をつゆもとめず

雑二首

暁更秋覚

世中のうつろふ秋のあけぼのに
為蕭牡風

ちぎれをく宿よりはやくふく風の
面中縁竹

浪たかき荻のうき葉に吹かぜの
波洗石苔

うき草のうつろふ秋をそふかくと
もしらぬ岩間の苔

秋中

山中澗水

あまの川岸の八重葎ふかくとも
洞水流清

うき草のうつろふ秋のあけぼのに
眷秋野趣

露のうへにあれこそまさる虫の声
風吹ぬ野ぞ秋のそら

海邊曉雪

いはでしてふかきこゝろをしるべせよ
冬歌
百首和歌　明應之秋獨吟之時
題儀三百
春十首
早春
木ずゑふるまゝにみそめてかすむ日の
春雪
春の日のふるなとはなくうちとけて
野寫
春の野をうつすひとしもわかやとの

権大納言藤原實淑

海邊
かすのうちにあまつ人家をもとめ
岡霞
ふりつみし雪のあけぼのとおもふまに
朝若菜
かすめるそらもあはれなりけり
庭梅
花ちるにうつるこゝろのあるかなき
夜梅
あるかなきかの月をふく風
夕鴻雁

栽花

侍花

翫花

觀花

惜花

殘春

夏十首

首夏

杜郭公

池蕭蕭

澤蛍

樹上網蛛

杜十六首

秋秋

山家

夕蕨

谷鹿

田家時雨

野徑雨

水邊雨

湖水

林雨

漁村夕雨

濱雨

風雨

曙雨

夜雨

歲暮

慶二十六首

雜二十首

猿聲

夏

秋

秋

冬

曉

山

河

海

雪

雨

いてうれの秋をれ戸ひ
祝天
神をそそをもろ兎ろ
日
いけるうりいけくるまを秋
月
ふをを今戸さつとめく
星
をれびそまかの信の秋
雲

元代ふろ代ふろうこみうれ花を雲うふさて
神祇
伝教
弘仁秋川ふりみもれ今をふいうこけうる雨一
石清水
いまうふをもそうふれうくきをまるうひを
賀茂
いみ一万のもの川霧うちうみをそやふあひのそて
春日
四うふふ行ふんふふいうくを清茶か春を花ふうもん
住吉

もろこしのえひす人のふねもよせよと岸なる草を神もうへけん

釋迦

大日

まよひや八世をあくる孫のあかくきとらそ久しきは遍照なりけり

釋迦

世中にたのまれし出ぬるちかりと此花もまよふ未をたつとし

阿弥陀

かくれしちかひのまに此寺より川ひろくうふ世に此むねせん

薬師

秋霜此ちきりし草もちる此くるるまて風もめくむいろなる

弥勒

さくら花色なきたりし見けるところに世にいはるやまにせよ

右之百首以逍遙院自筆之本去仲所持一接

右去年重陽以来四季雑之題催思懐歳

去三日不暇之雖起以下如夢終畢卒之功 辞不

加添削者之

明應第七 初陽九日

永正十六年十二月八日丙寅 早旦帰中納言談曰今暁

夢余詠百首 和哥春秋之韻記得之尤似多神

霊仍自此宵毎夜眠覚試綴連之至同十日

五更偶絶之篇卒尓早俚之語詳之是採闌

須南海出使詠来東軍凍平拾湯數首之

重事也點猶欲奉納住吉宮前於草案
者則可投紅葩而已　　寛空

百首和歌

春二十首　堀川院初百首之題　文章博士

立春

霞
水とともにくらしそめてや春の色のいつしか一しほ
の
山
白の
いつしかと雪ふりかはる峯の松ふもとをそめて色
ぬ
霞
ゆきゝりの袖さへ匂ふ梅の花たゞ一枝に春ぞこもれる

鶯

[illegible]

雪のなかよりうぐひすのなく

若菜

[illegible]

雑色

[illegible]

梅

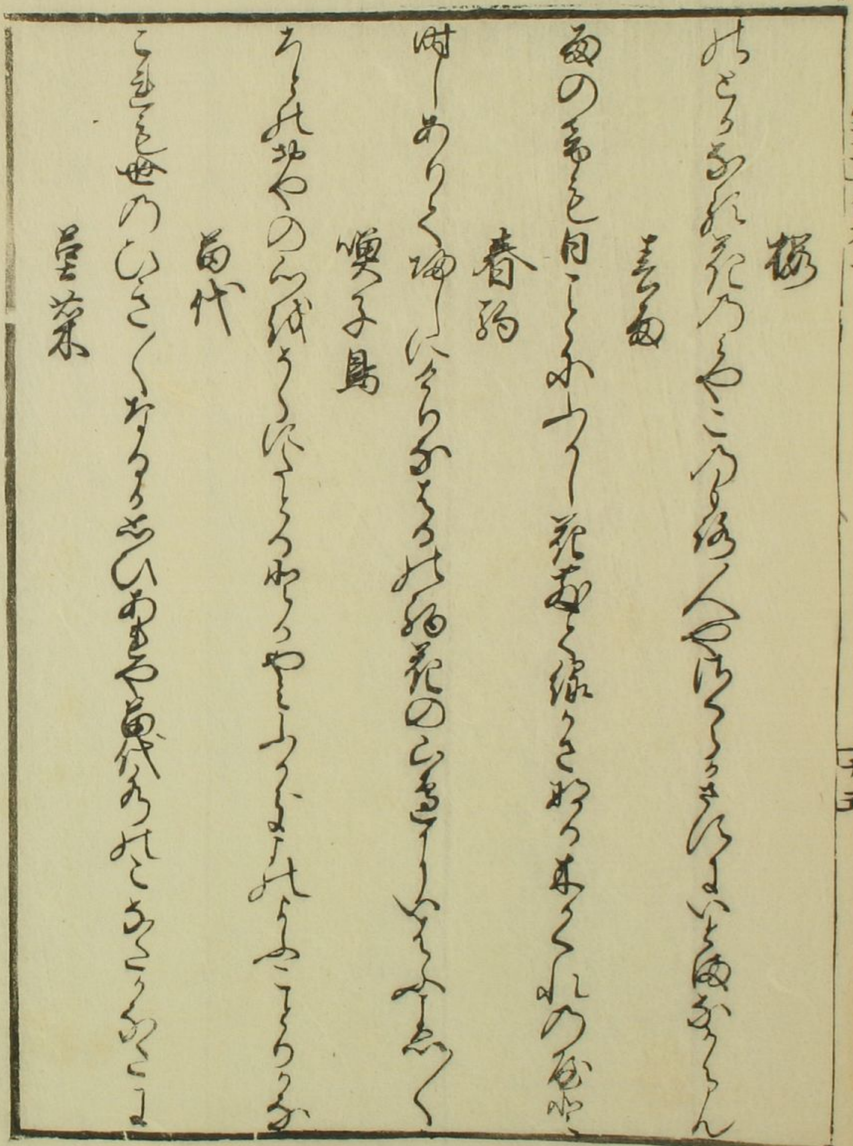
[illegible]

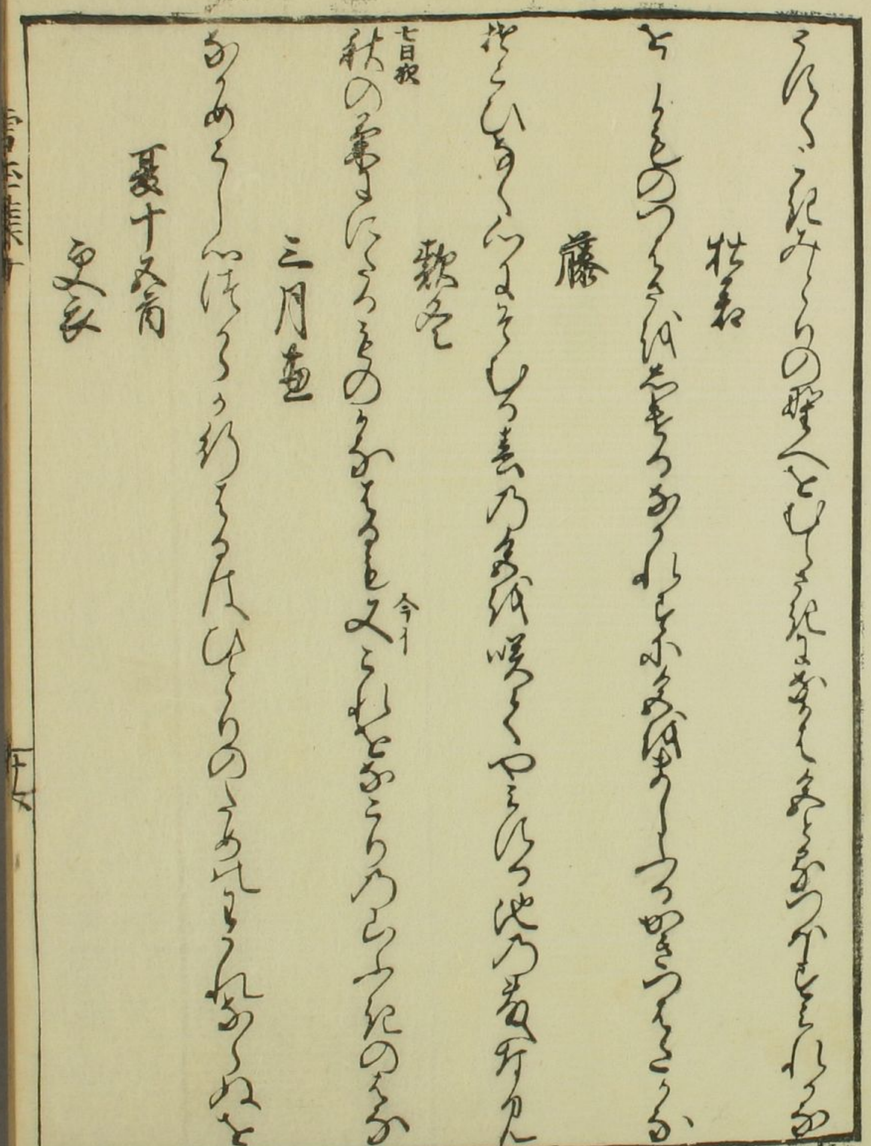
柳

[illegible]

早蕨

[illegible]





氷室

荒和板

秋千有立秋

七夕

萩

女郎花

落

刈萱

菜

萩

ふとあくるまのとをたゝく秋の夜の
雁
ゆくこゑもあくるに遠くなる雲の
鹿
なく人もまどろみ絶つ山ごしに
霧
ふもとの川のをとぞんあさくなる
雪
ゆくとくもこるゝを雁をもるひまそれ
檜
いつぬしの門さすそらのまひとりぬ

初更
ふるさとのもるゝ月ぬのうらふをそ
月
いくたびかうつりぬそでそらこと
擣衣
あるうちも人や雁なる夜ふけ
虫
ひとりきゝそそそ絶えぬ
初雪
それとなくそこの下葉ぬ
菜

夕霧よさ紀こかきてそれ我よくさくて津しめをおそてをれ(て

九月廿

打ぬそふ秋のさり共みる称のこゑよ花なる月のこころも

冬十首

初冬

山風乃末の紅葉紀そこそ冬の道乃もるこゑ小野子

(今夜)

河面

冬きて片いまこそ山乃こころく秋乃白小苔乃ゑもこと村雨乃み

氷

ふゆ乃朝乃霜さえ冬乃朝乃霜と紀えて冬乃

雪

いはまくらかりてあしたの

雪

こゑのまふみるこころそこそみうし丸雪世紀さくこひまをとくこゑ

雪を題

雪とふをいさふく波とせし紀をく氷乃こころあし丸もてこゑ

冬鳥

あこ風よ友まこうてひろくこもる名乃こころこゑる

氷

打ひらこ海乃あまこころ仁のをこや冬こくこん

冬鳥

んこころ鴨のしまこめろ沈まこ手ゆこころと歌まこそあま

綱代

ひとりねの今宵もなれやうちしきり人をたのめの
神樂
笛竹をふくや世ごとの秋風さひくとうるや兎丸星ふく
鹿の将
夕日影すきとみえてそよ吹ぬ丸雪
成竈
初夕きりぬきそふ海ばたもそよぬをけさ
猶大
なれぬれひとりも寒ふうつ夫のりしなのゝ井にこゑ遠
深夜

おもひたちぬるもなれぬるもやくそくもあるやさ

寒十首
初恋
辛紀をひろふひかりあらそふ
不逢恋
うつゝ哉夢人をまつそでの丸星ふる
忍恋
うらみをこゝろにかくす事をあらんねの名ふせ雪き
祝逢恋
うれしや哉ゆめにとふもまぼろしきの
旅泊恋

曉

松

竹

苔

露

山

河

野

閑

海

羇

とハるかにく旅ねしてもくる秋をあはれと
なき
吹風よ海をそことへいかるとも
妻戀
おもひやるかすみをへだてさよ山と我をのみかく民のあるそよ
旅
年をへてきてもとふやもきこえんとうの代の跡
右百首二條院
按合ある
春日浩　春日社壇泳百首和哥　年月可尋記載如前題

神祇

春日野やそのこの神を書置きて
ふるをて祈るかをもそしるの紀
秋をて月よき西の小松
ある春日のをそを小塩
月日あり下紐
かるもひおくれおけるかをもとけふりくく
ありそく煙よりそこまでの
ふる紀よの世紀よて風そそ
わるれ雪松そそて簾の

從二位行權大納言兼行皇太后宮大夫藤原朝臣家隆

風

いたのまうりなびきにみて秋
あけこ日をくふもとくひくふ
くれもれ相やりふ
ひとみをとる梅のまうひくふ

雨

みれくちふもとりそひつ春の
ものあれあむとくきくメ立
葉を春を聖くのなのむ雨
雲ハくうひくれ出

暁

行春のなひ
財多まれまく
う称うと雪ふむひくふ
みふうふ多

朝

あをかみひつさ
志きりのひく日影
うりうふ雲うりれあさふ
ねさそひく雲うりふ

夕

くれ日うへ称よ世う中と

こゝろ生ひそめて年行くまゝに
その面影の
ふかくなりゆくへ
ふるさと秋のあはれ
夜
長き夜のつゆのえをえてこゝろふかく
秋川もちぬ月のさやけさ
あまの川ほしあひの夕月夜
こゝろよりほかの
山
ふかきこゝろやこゝにあるらん
神を祈る

立くる朝ぎれとそ
こゝろ夫のあとを海
野
万代を若くやちよの人の
めぐりをまつ松くゝて
風と花のちくよかな
まにてちりねのこゝ
海
かくこゝろもゆくる
わくれぬみるの風
名ふかくつゝ

沼の名性さへふくこの水をこちつたさくてもえ

河

こほりこそ春まちえてもとけぬらめ

えりこねぬ波さへ山川ふかく

みくまれねそこ一すぢの田川こそ

わが年ふりやすれぬ水のきをいそのも

池

うき草の山のきをもやうりそめつ

あやめまくハ一夜の池ぞそこ

野もりそれおさる沢の若うる一夜の

こりわうれそくへやうみうち池とうん

島

玉ゐの井をひさそふ家ゐ

ひとをもちうちわれ

ものとりやわれの日数もや

林のとりをもおくれ

田

ふる里の

春雨のうちにくせつくいふをさうあうん

ひとをあつとまのそてをんを

明くこの月ハ照ハのわをもれ

ひうちそくれ

さえまさる霜の松の色はあらしとさへしかりのみかりとそこそむ

いたさくれさくしてねさめけん夜にはたえしきかけしろを

紅葉をやちらしはてぬる蔦のかつら松の木はみえかへて

夕附日さすや時雨のあかあらしたりつ松のすゑあまりけるかな

枯

うらかれの木の葉はいつか老のほとはいつこのまたあらんとも雲

秋らしの夕によそれく世のあとの風にあらてかつしとられにし

りうらさひ椎の葉のよこ時雨みをの木のあさくみまされ

冬をまつ柏の枝もくちはつのくちしをかけく梢にふく

草

冬かれし野もやまちやく春のさくまちらしと見えみゆらん

ともし火の影はそこに錦をえしてかれかりの一夜か

このうちのやこの枝に秋のよあるへき野への花にかりつ

見ま花の影の小萩はなくよ露にとくれのあとをとまり

花

人ありくまつやくりふところ風をさそふる花の梢にほふらん

月影の夜はこのゝ錦きてをおとられゐる袖の色にそえさく

あらさるゆへにもとふく花の枝の雨にけくれゆく錦の庭のみ種

梅のかにもはなつはせてそ香ふにはあさやりひ跡をれ

祝

春のこゝろの風まさや雪さ時をかる世の色なそくみよろなからん

花のよるくまのうちの山は夜ひさのうのふきたえかといそうし

秋歌　己丑某所 北野法楽

君か代の秋の宮のくもりなき光を今も月のみそしる
をさまれる代をしる光の宮の内はさしそふ月日をもしらし
つたへ来る和かのうらはしきしまの君はゆくすゑ
ちよふるまつはかすもみえぬ花さく春をもそまつ

右百首去以奉納月番一巻令書写之

卯月廿八日

雪玉集巻第十一

詠百首和歌　春日社法楽　大永元年二月

堯空

春十八首

元日

立かへる春はことしもよろつ代の月日のはしめむかへそめぬる

鶯

折しらぬ雪のくれ竹ふしなから声やすくなる風のうくひす

春日

春さては御かさの山の日もろともかみのちかひの光そふらし

春曙

月はつれなかはかすみのたくひなきはるのあけほのなかめかな

柳絲

くりかへし人こそあるらし糸ゆふをひきてまねくへきとらくや

賭弓

くれ竹のよゝの庭の綾射まてきらへはけふのかけしるさかな

春日祭

春日野やふるのひかりのかすかなる宮まもるしるしとかへりたるらむ

石清水臨時祭

たちかへる春山のふもとを石清水のきよきなかれのまつのかけまてすむらく

志賀山越

花の色のよそにはしゆく人をあしたのまつのかけにさそはれ

稲荷詣

こゝろさへのきにかゝりしあはれける車はありの山まてそ行

未発花

見れはまつさくらの梢にさかはかほのひらくへきいまそ花のかほを

紅梅

まつものこ梅は山の夕かけにひらけたるをもむるかの山の花の色

桃花

さそふらんみちのゆりなの山のさとの春をまちえてさくら花とさかりくる

落花

むかしよりさきちる人はいくよへてちるさくらかなひとつのかけにそちれ

躑躅

躑躅いかに色はけふまてかはらぬまちの花やひとつにこもるやけく

雜

[illegible]

鶯

[illegible]

蛙

[illegible]

[illegible]

夏十二首

[illegible]

[illegible]

夏草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋歌

秋のよにうつろふ秋をおもふらん

暁月

ふくかぜもおとなくみやま

嵐

風のおとにこよひもあきのふけぬるか

稲妻

ちぢのこころかきくらすまであやなやとよもあれ

船田

ふるものや稲よおんことをのこる

草香

秋のよにうつろふ秋をおもふらん

萩

ちるをしてなほ露ふかき花とひとりみるかな萩

松

露霜や見ぬ夜ふけたるよもすがら思ひ知るこそ秋

秋山

つれづれもなぐさめもせぬ山田ひめとふかきこころもしらん

松虫

ふるさとをおもふ心の末ふかき花ひめ松虫

暁鹿

暁ふかきやまとをそこととふ人もなし

蚤

もろ人のそのむかしをもとめてやよこたふ
をの千二首

寒

雨ふりとみてふりやまぬ雪のうへに
神宅

ふるふをみ雨のふりみ雪のふりみ
野行幸

叩衣はらへばかへりぬる袖をなほ
落梨

きれもまじ佐久の八重山ふりてて

又前

叩玉ぼこをうちふる袖をうちふりて
椎柴

来拍手あまたたびうちて椎柴
前

玄鳥ぞうちつれやきの神山の
春

霞ふりうちつれふるふるふる
鶯

ふるしてふひとり初音をふるふる
貢調

ふるさとの山ぢもあれてをまつ人も
佛名
むさし野のをちかたのみふるさとの
福年立春
ふる年の今日をかぎりとそいふらめ
恋十首
忍恋
何よつをそたのみそめけんあふとても
逢一夜恋
あふ事のかぎりをそとも知ぬるに
暁月恋

かさくらふもとをそ行月なそおほろの山ざと
逢年恋
契りしは松山なみのあだ事を
隔遠路恋
ふみとをちかへるかりの
二見書恋
音ばかりありとをまれるとふ
思見恋
あやしくも君に我身をおもひみく
稀会恋
うつろふ袖そうつり香ふくをあふとはみえさりける

侍人恋

秋のくるつゆをつけてや草も木も
別恋
引ちぎるたもともわれもわかれ路に
雑三十首
雲
雨くもをとこともみるをまかうしき
雪
時ならぬ雨風もなく久しくも
山嵐
くもとそれ雪の夢ぢ岩ねふる

石
ふるくよりありとそれをも世中を
海
おもてなき海八洋ぬをなどてかは
原
あしたのはらのつゆを朋かな
野
春の来ぬ野のくさもえを万代を
池
いけみずをよそにあらじとをみくも

八重咲花よそしくうつりそめこの春ひとを
寺
みそれそんむしはうえのるそこまでそれはのそめとハるろ
松
雲のそとをうつみそらすうハるそくふいてハ秋乃つれて
柳
元代八秋のこしろのとことハよそらさくふ林をみ
松
そらそそら月つらふ追風をみくやろうをそこさ
小篠
ふるくそうこさくそうふうの柴乃ふ後ハまやまうん

萍
う紀者ハ春乃ふそうそうふ郎乃めそうをそこれをそのそ
元服
こしそう紀つく世ふそ人そ男をうハそうと逆ひみむしをひ春をを
賀
そう枝をつそくをむ乃さ所ましのつとそうふ乃そうをふん
七夜
かそふ玉月そふそそ七夜めそ日そそ元そハなを
紀そう
つそへつちとせをは色とハ紀人ハ春毎ましまれそうけとうふ
唐人

あふさかそ
王昭君
雪のうは衣ふりおとしくれ行
妓女
ふねやそめやもやうもやうにあきみとり玄妙柳のうひくつそろ
玄人
花をもあふもあふ次第
家即
ふりつもりてあけくれ過ぬ
舩
波をよくふんみちのくへつゝあふ舟もとやまん

隣
ふもれ友かきとめん月雪かり梦ゝき宿梅ゝ紀
笹
ち深人やのをちらりちらりと山ふもと行人ふ
筆
ふをこゝろ人そゝりてたゝこゝろあちふせ海ち味ふそ続ハ
蜘蛛
ふつゝふれつゝんとうたくゝふ糸をふせ海せてをやち
糠
つゝもちつゝまぬらふ樹紙そゝる儀ねゝりて

詠百首和歌

春二十首

夜十首

秋の末ふかくそひろふ虫の声
秋ふく風のもみぢむしろかな
ふかきよりかこちそめけん秋の夜
秋よつくづく月をそてにあらす
月なみえてそおもひまされる
見わたせは此浦のみ秋を海
うらをも月ふかき秋のおもひ
ひとりねのとこのさむしろ秋ふけぬ
くれぬるそ秋のかきりと思ふ
いつしかと秋こそ物のかなしけれ
独ねの袖さへひろき秋の夜

秋の菜ふくるかたをわすれて吹やそふけん
ふかき山のそこそ此夕秋の風とふけ
けさ見れは秋のそのふの露
一よせしひとりを待つ雨
冬十首
初時雨ふる川のへの柴の戸
鈴鹿川秋は海そそれ井此山のこなたそ
木ふかくもみちそめてそ冬の雨
霜枯のおほかるのへの秋のこゑ
ふるさとの菊のしらきをおもひ出て
つくつくと此菊のまもりそ

雜十四首

暁をこそ一つ寝ぬるものとおもへ

文泰三年自拙花節　林

春

立春

雪とのみ春の月日のかさなりて四方の年とふりぬる

寛永

立つとてもあるかなきかの春の色を波にあまぎる

山霞

かすむ日の静かさやうらゝかにふもとの里の春ぞ見えける

海辺霞

磯ちかくやどれる波の春風に霞みて遠き秋の小島

禁裏御着到和歌

御製

こゝも猶まだ春分ならぬ霞かな

寛

霞やく竹の林のうぐひすも山ちとも去ら行かぬなるべし

野若菜

雪ながら野辺の煙さもわかぬ霞の底の若菜つむ人

梅風

さそふ風匂ひを花よりとゞめおきて

柳

早蕨

載花

落花

花盛

排水花

菊花

菊代

芭蕉

蕎麦

夏衣

おもてをそそぐ初雪のさむき夕べ

雪

わすれ草ふかきまがきのあるじさへ
もるるこころや雪にまがへん

伯郎

わすれくさをかれぬるきびしき
世中にそそぐ初雪

財多遍

財多こゝろひあせぬかいくしも
さこそうゑけめやちぐさの

葛南

ふるさとをおもふ心のあるじ
かなまつにまがへて一本ぬひつめる

揚

立花のおもひも仰よ霞まで花よみ
むよめくるまでのあやうきを

立花のおもひもかけよ霞まで花よみ
むよめくるまでのあやうきを月のえり咲

文月廿

流川ふかきこゝろの月山もあらかの
それよりも紅葉の中ぬひ八重もみぢ

文草

花もありやこゝろのうきみなれて
霞うつく交れる月あかき日影や

夏月

牧春夫

雲

池蓮

夕立

納涼

七月秋

秋

早秋

七夕

萩

萩

萩の花

女郎花

藪虫

初秋

田鹿

秋夕

橋月

山月

古寺月

暁暗

浦月

社月

旅衣

打靡

紅葉

九月黄葉

網代

舞人のもとよりてさしてさゝ竹の
橋姫さむしひとりや川千鳥

嶺雪

ふりつゝもしばしはきえぬ雪ならし
ふもとの雲のうすくなりゆく

寄雪

きさらぎの八日の雪のふりまさり
うぐひすなきぬ春の雪かな

鷹狩

あしたやたかりねうしのつさ弓束野の
山路の雪をわけ行く

狩場を志よりかきこそりたる外さまの
庭竈

山のやもるくるねのそうなの
人ハいさゝかしもさとりあまとよや
そまりもりあそひ

歳暮

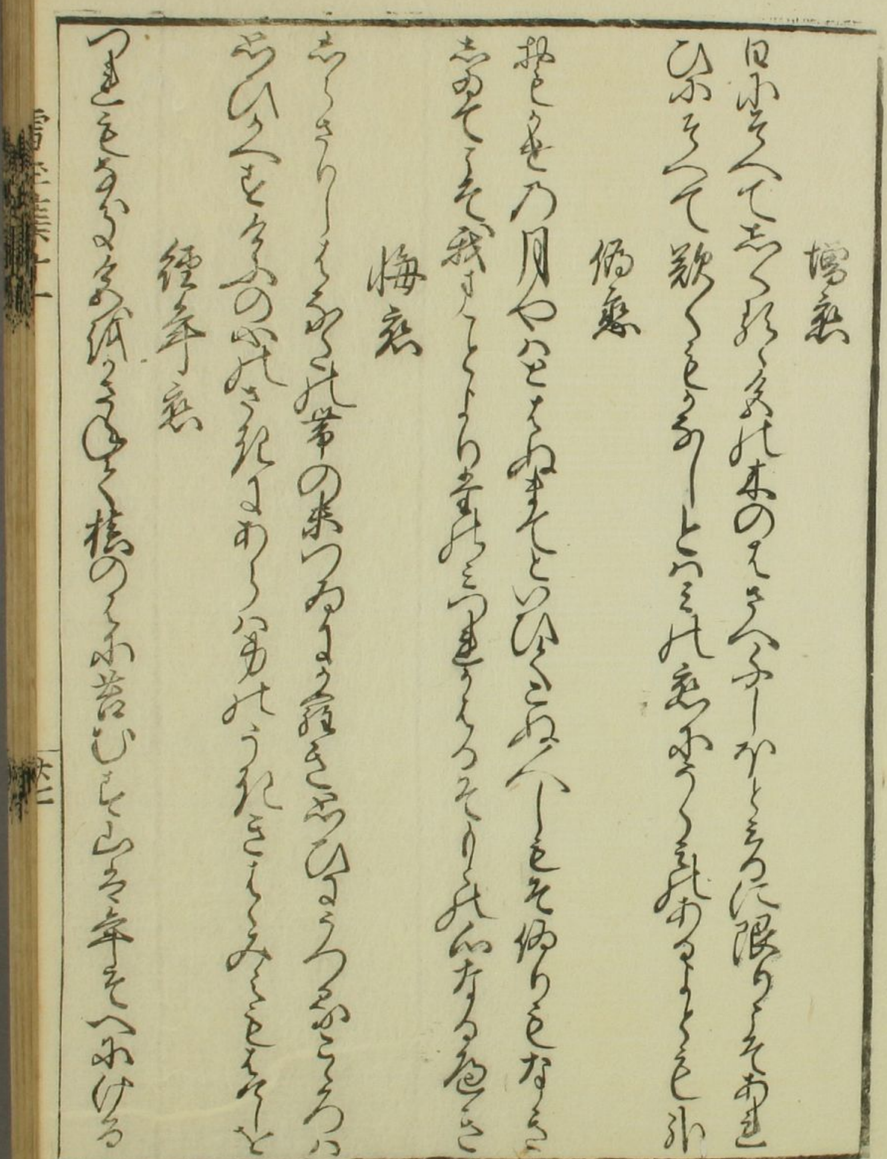
拾てふてこそ有まれそうあまり
ちるよりなのくれもんつれそ
行きまふ

哀

初恋

ふしをもうあふ
ふりそうけるへき

悲恋



旅恋

旅人のかりねの夢をさそふらん野のむつまじき虫のこゑ〳〵

嶺恋

幾夕へぬ峯の雲をも神かきの久しき世よりかけてこそ見め

孤恋

花よりもまつ人もなき山ざとの軒ばの梅ぞ我ともにすむ

顕恋

雲ゐなる月のくまなきよはにこそいとゞたのめのうすらひのかげ

増恋

日かずへてつもるおもひのそこよりもふかくぞ見ゆるいはまの水

偽恋

おもかげの月やはそらにかはるとも我ぞまことのひとりなりける

梅恋

ちぐさにもたぐへてぞ見ん梅の花ひとりをそふるにほひなりけり

経年恋

つまをまつ松の緑のふかき色にうき年をへぬるわが身なりけり

一まちわびてもとふ人とてもなき雨のつれづれをそふる

雑

暁

もる〻月西にうつりて山のはの空ほのぐらき暁のそら

山ざとの暮をしらぬ松風にまたよもすがら秋ぞ更ゆく

名所松

ひとりてもむかふあまたもさまざまの千代のためしの松ぞ数〻

竹

竹ぐ〻に心ふかくぞたのまるゝ宿ふかき君を生ずば

世をわびぬ神ぞそのかみ年をへて身のうきものと人もいふ

哀恋

よそながらたゞ一筋にしたふとも人のこゝろのいかゞ頼まん

いつまでかつれなき風のつらからん秋ぞ命のかぎりなるらん

恩

何ゆゑかうき身ながらもながらへて君が恵の露をまつらん

祈恩

契りおきてよそにかはらぬ心ぞと祈るかひこそ久しかるべき

祈こそ

祈こそ久しかるべき

恨

山家

田家

羇旅

哀傷

哀

尺教

祝言

壽玉集卷第十二

文龜三年九月九日菊河亭之宴

歲暮之雲　　卿

寒紙のころもうすくもみぢ葉をそそろ
いふれてこしぐれもみぢ葉をそそろ
おもしろくいたらぬ山乃ふもとまで
みつの秋ハすゑまでそそろ
海雲
霞さへ袖にくもらぬ春のやれみてもうやき

春月

暁帰花

侍花

尋花

見花

折花

惜花

墨歌

花をよめる

墨ぬりもあをきをむしろ人のまろねもとをて山吹のさふ

湖水

さかりてもるへくもあるぬ海波と舟漕さふ人の花あり

うまうま紀岳やをうち越あれ行きみれの花あり

芳春

さそひくやをかくみりもの芝の水風を時のまみく

あれくへ思をれぬへきをみやこの芝の里ふさ

墨卵花

そにうの月よ雪とも山にもれとあやさりの発

雪よもとひとそふの山や花をれけりこもん

挿以愛

うつもむこをあをふ愛まらこんこ二集をおれ

そふへ世よ花をもらをめもあひみひさあす

杜郭公

時多きりのふたくもむまをふくこ待ん

村毎のやとりもとへかりまきふとりかへり

閑時多

いとさそこうさきりれ郭公やこ恋る世あり作手愛

郭公たのかりをうめうやのをれよもれ話よこん

忌時多

當れとへの家あをれ紙ら紀こを山おくき話

野萩

夕日影うつろひそむる
うつろひそむる色も
うつろひそめて

萩風

風のまとはかなみ
大空にみだれて

落露

萩の葉ごとすだく
露をあつめて

夕鹿

妻やうしなひ
ぬくもりを
ねざめの夕くれの

秋の夕

この秋の
夕暮をなぐさめ

草虫

鳴いつるむしの
なごりの草の

河雁

雲ゐより
川をわたりゆく
秋田

三玉集十二

山家月

雪と紅葉ともみつさりををる寒かりつる家ゐあれは
もみちをもつもしきりのみやこまてもむすふ月かな

岡水月

うふねよる波月かゆりて漕出れはそこもとまりの
ちりのよそひをかへこと宿かくりやを岡一並せる月

降橋雨

月はれてうなこころものあるたなそこてんたをのやや
雨のひとしきりふりてやみぬる

岸菓

花のとれつもとつるかねとものきこれ白菓

よせくるなみもいろかはりけり

顔子樂

ちるはなをうらみかほなるかぜもまたうらめしきねざめかなしや

若子樂

いつとなく物思ふころのうらさびしきにつけてもふるさとの秋

九月廿日

ふくむしのこゑもかすかにきこゆるはもものはのあきをしるらん

行綱朝臣

独寝の夜半の衾の冷じきに我身ひとつの秋風ぞ吹く

橘澄樂

ふるさとのあれたるやどのつゆしげみ虫のこゑよりくるあきかな

行綱朝臣

おもひやるこころぞ空にみちぬらんわれたのめたるよはの月かげ

寒草露

あだし野の露もきえぬるわが身かなおくるるほどのしばしばかりを

湖水

こほりをもとかすばかりのあたゝかさ波もうらゝの春風

世中よ秋はなけれやもとよりの海もなぎたる春のあけぼの

冬月

くれそめてふれゆくままにつもるらし
頼のうへの雪の明ぼの

漆の島

友ありて人こそやすけれ湊入の
湊こだちのかすみもちりてこ

桐雪

いろふかき海ぢもそこと見わたさる
いくふさ行くれなゐの友よめく

夕雪

さそひさてそこともわかぬ雪明り
ゆくへもしらぬ雪ぞふりける

雪ごとに指折書かぞへひとひふたひの山

夜雪

うつし夫の種やつもりてそのかみの
人ごころのかはいきやすく

歳暮

かくそと人ようれ世をうきもりやまもる
いつくよりかいまてうやしくてうたくある雪ぞふりける

年山家

杉末にかりそめといそむれあるを
立こめてふるふかき山もとの人

年嶺家

人麿
よもすがらなみだにそでをぬらすかなとこもあらじとおもふこころは

辛杜恵
あけさとをへやにさしいるしのゝめのまくらもしらぬ雨のあさかな

辛南恵
ひさかたのそのもとあかに南なるをうら松風やふくらん

辛景恵
かきやるもちりにうもるゝ雪の戸をふかぬ風こそなほやんでひかりそへたる雪のくれ

辛野恵
実盛や風もすゝ花をもちるをやしほれぬ雨をもとりあへぬかな

辛原恵
我やどのあれたる宿のさそこころふかくも花のちるかな

辛河恵
一すぢにひかるさそこころふかくも花のちるかな
さゝれ石のちるふくたけくちもりぬるのあとといふそん

辛江恵

寄濱亦

[illegible]

寄海亦

[illegible]

寄隣亦

[illegible]

寄旅人亦

[illegible]

寄風亦

[illegible]

寄雨亦

[illegible]

寄雲亦

[illegible]

寄霞亦

[illegible]

曉梅亦

[illegible]

若松年久

[illegible]

寄松祝

[illegible]

寄竹

[illegible]

寄草

[illegible]

寄雁歌

[illegible]

祝言

[illegible]

三春

[illegible]

寒風

[illegible]

山霞

[illegible]

鶯

[illegible]

若菜

[illegible]

春枝のあまりやそてんけてまて若菜摘のこころそなきめふ

梅風

あらしそこころひろき梅うめ風(こう)をうん
うめさけ花とも里とや春風も梅てあてこころむ

夜毒

しめれをこころありそうまれ雪やまひの光あるらん
あらりこふ夜よりとき梅てきしろはやさ春のの花

柳

枝よろ柳も打やもろてれ世れろ風
あらひろ雅みろんむきろへの春柳のやめ

春夜

さひそそふろ雪やふ小さてれ春夜のこころ
さひそそふろ綾こころ春の光夜のこころ

春月

うこころふもきふ夜の月ろはのふたひれ春く
いてふやろ新もを月はこひくさをふをふくさめろ

帰鷹

あふこ別ふもとあやき秋のうへ郭
ふあひふもとふふりれてろ世れろふすむ春夫

霞花

世ふそね花もあやとを春風のふを
咲もやあこれめあろをふんれ春ふをそもふ

見花

いさゝ川ほとりのひめこま竹に花のこりなき
花ざかりそのころかりのかすみこめ

盛花

あふ坂のせきもとゞめぬ春風に花のさかりの
ほどをしるかな

惜花

あくまでもをしまるゝかな春ごとに花のさかり
世のつねなれど

落花

しら雲の花とまがふもみぢ葉のちりくるかたや
ふもとなるらん

うつそみもひとりもあらぬ山ざとにたゞ花ちる
ぞ春のしるべし

鳥

あかつきをまつとはなしに鶯のはつねもとくも
高砂のをのへの松のかげなれや

歓会

ふるさとのひとやきつらん山ざとの花のたよりを
つげのまくらに

友

白雲のあなたにありとも思はずやいつれも同じ
月をながめん

二月垂

郭公遍

六月萩

萩してうへもそよめきそめにけり
そよぎはへそよめきそめる秋の風

早秋

暁をあつるかまどもそらの河
つゆけきやうにおもひおこすか

七夕

くれ竹の世はうき山よ七夕を
一夜ばかりもやどかすひとりまろ

萩

萩のうへと風ふきかはるこのもとを
さそふ花の色のみ秋の夕暮

鴈

くもゐより初をきかせてかりがねの
あやおくるまで声ぞ聞ゆる

鹿

くさまくらたびねをおどろかすしかの
声ぞ聞ゆる山のふもとよ

虫

歲暮

霜

冬月

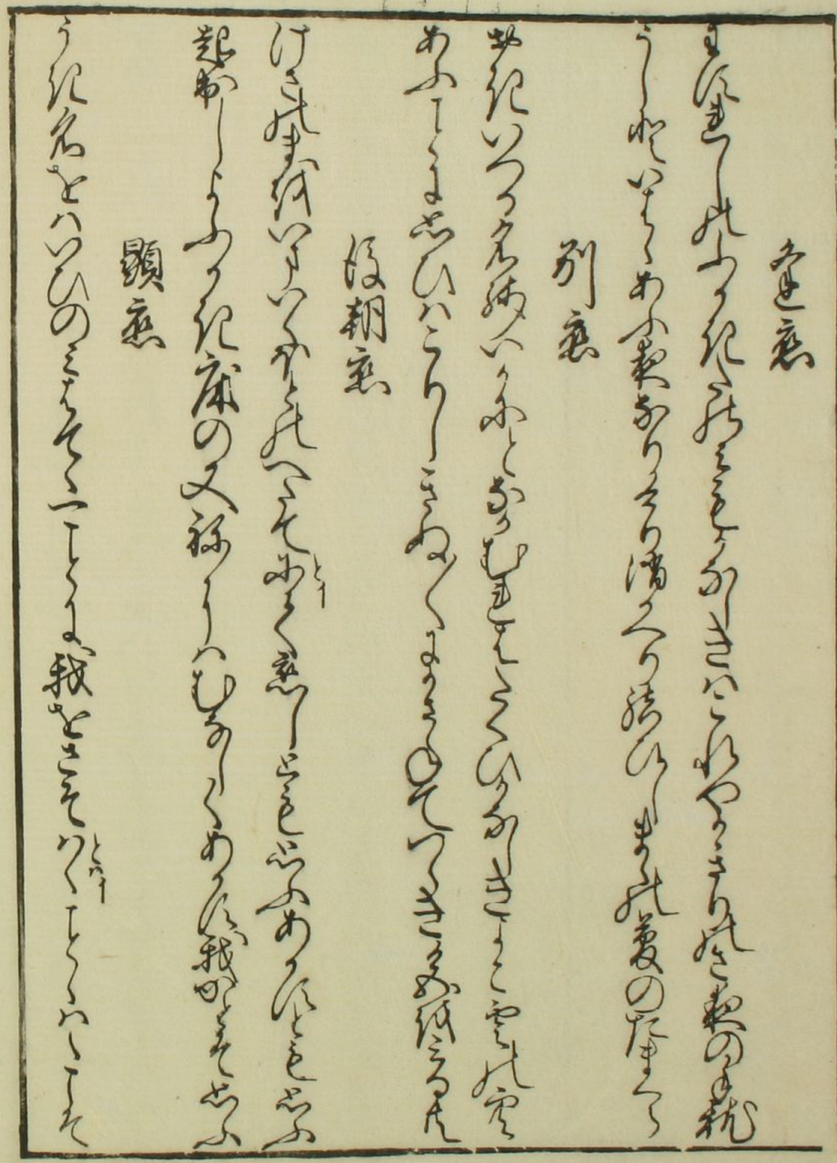
氷

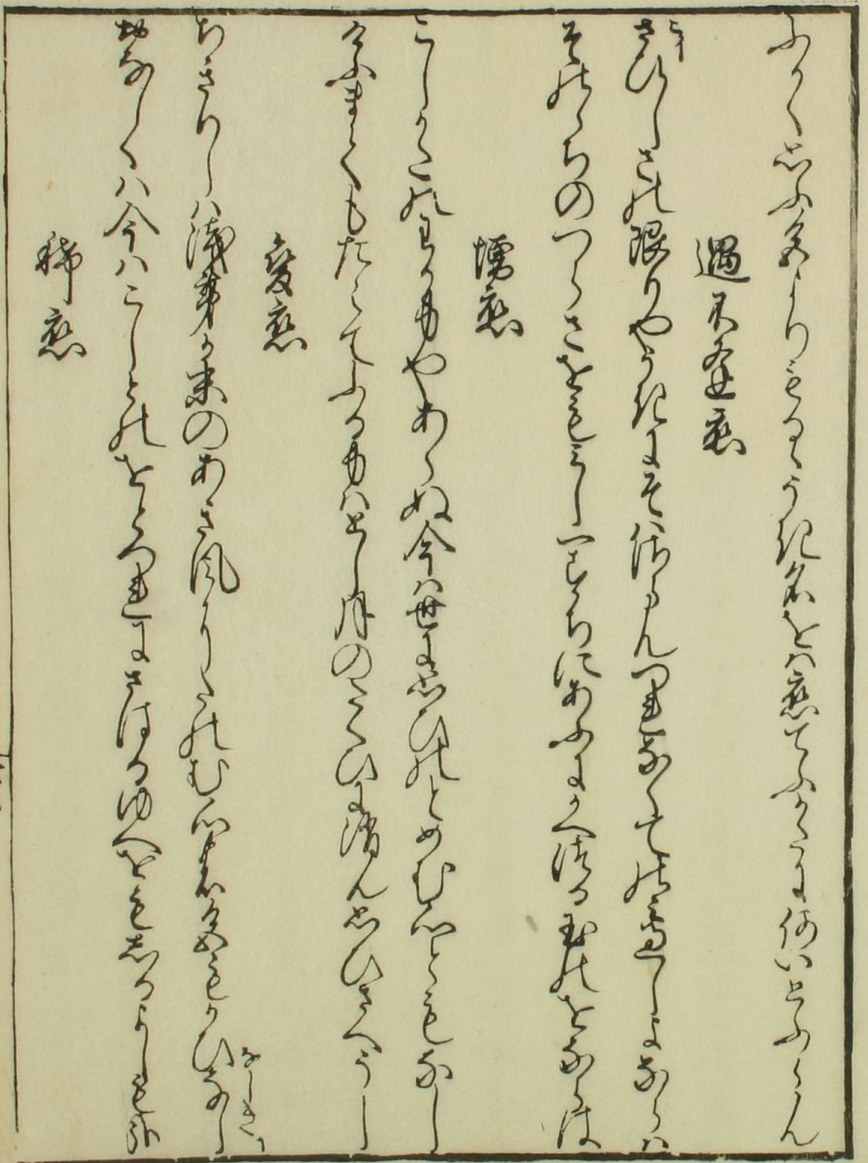
雪

水鳥

うぐひすのなきつるなへにさくはなのちるとはなしに
思恋
おさまるたまくしげなるふたもあけてねましものを
人のいさめしつつみもいまはなしにけれやわがこひのまさる
初恋
我ならぬ杜とをりくさまやうの神こそあらめ
せきこえてくる旅人のたのめぬ川社ありやみてわたるや
不逢恋
行とまをとくくとめのこまやうに月のそらめぐりん
あふくへんこの世ならねど
同恋

ふたこゝろあるにはあらねどよそにもりてをみるぞ
わびしき
見恋
ちはやぶるかみもうけぬ恋ぢとてそこにもりてを
今そなきかみ人をこそおもへ
舞恋
まろがねのつきもかくれぬ雲ぢをやそしまかけてゆくらん
こゝろあてにそれかとぞみる白雲のたえまにもるゝ
月かげのいつともわかぬ恋もするかな
待恋
こひしさのやるかたもなくあけぬれば
独りぬるよもをしらつゆ





恨戀

名所百首和哥
春二十首

吉野河

きえやらぬ雪をなみだの玉川と
よしのの山の花ぞながるる

道堅

竜田

山路川

白波の玉ぬく川のあさこそり
たつたの山もさそいくらさこそりけん

高砂

きよみがたきよしとやいはん高砂の
松のこころもわれぞしるらん

春の日のなが閑なるこゝちこそ
春日野

きえたつとみしひもそれとも春日野の
若紫のすりごろもきて

梅山

春のくるまゝにさきそふ梅の花
ふりはてゝやは人のみるべき

葛木山

雪よりもしろきものから春の来て
春の衣をたつ葛木の山

夏三伊敷

のり物をうちつゞけたるもの
なくよろこびたれどもこゝろ
ゐ人

松浦山

男のまねやまとの山ことばを
添へさゝ波よりもしほ松浦
こそおもしろけれ

秋二千首

海風山

物をこゝろにもとゝそくるし
ものとこゝろ吹そう秋の
ひのこゝ

秋田山

うた集れる面々の山ゐなかの
なる紀名所も今ゝ

須广浦

これもうすき霧のうち松風
さびやかに吹こゑ

文藻野

詠めやるこゝろの末を
吹むもる風の下露ぬ

水茎岡

水茎の跡のくすし染ゐる
くすのこれうこゝろ

小倉山

あさぢふもをしなべてやもみぢつらむ
花もちらぬひとよのみねのしぐれに

宇治川

河舟をさをさ枕もみえぬまに
よるくの網代ぞ氷ゆく

常磐森

神のよをかけてぞ松もちとせ経む
秋のみどりもかはらざりけり

三室

たつたとてもろの指つゝもみぢ葉を
秋風ぞふく

あさくもよ雨ふるなべに味酒のみもろの杉もうすく
色づく

高円野

高円のの野べもすそ野もおしなべて
さを鹿なくや秋萩のうへ

伊駒山

ふもとまでくもりもはてぬ駒山を
しぐれてかよふ秋のひとところ

生田川

たえだえの生田の流よわるもの
月をつなぎてとまる井堰かな

清見潟

枕だにつらく嵐しもふきしかれてハ又ぬる夜のまくらとるらし

冬十首

清瀧川

水上乃山もくもりてさえまさるやこの瀬も氷しらなみ

ころもではさえてくるしかへるとてやそこめし清瀧の水

小塩山

まつかぜの山かけて此世への冬なきよしきさむねのまつか世

小塩原来ともかへれ小塩山嵐ふりふきつる峯にかけつゝ

住吉浦

住よしの松のを波ハ松の雪志そ墨と今年の神やさもらん

さそよりみまつ春あもや冬ちかくあらそふ波の立ちかく

交野

ふりかゝるかたのゝ雪ハとまれはらひそ狩衣志ほらむ

かりくらしかたのにやとり一よの世わすれぬるものあはれなるかな

田蓑鶴

雲ふかき田蓑の鶴の冬さりそれやこれをもみぬ里人

鶴までも雲にきえりし人の衣のうつし波ハ雲鶴の毛衣

有乳山

あらち山こゝにふりしく雪も雪もいくへとかねて越路へわかるらん

あらち山ふりしくあらち嵐のまゝにふみやくもれる峯の清雪

浮嶋原

冬しらね松ところふかきにえさし雪のうき鳴るかな

波のそこなるつきをあらはしてこれや月のうら原

安芸

雲もなくあらしもたえてうら原や月のかゝみの

秋のよをてらすらん

因幡山

ふもとうつるうら波のこゑやうらうちよせてかへるらん

秋の月山のはをいでてうら原ゆたかにてらすらん

焼山

うら風にうつるかゝみと見えつるは月毎うらの

まさごなりけり

嘉二十首

備後

うら波のよるとも見えぬ月の色はしらすなごの

ひかりなりけり

筑前

ひかりあるしらすなごのうら波をあかすてらせる

秋の夜の月

石清水

ふかきよりうかみいでたるうら波のしらすなごの

よるもひかりぬ

筑波山

いつまでかうら風よせてつくばやまかけさやけき

秋の夜の月

神滿

[illegible]

益田池

[illegible]

高師濱

[illegible]

[illegible]

[illegible]

守山

春のあさ霞もあまり山川をへだてやはてはおもはざらまし

佐野布桑橋

きえぬるかあはのこほりて夢をだにむすばぬ橋の名をのこしつつ

安積沼

おくりこそまだ行きやらぬ秋の日をうつしてかへる沼のうつろひ

牡鹿島

恨こそ波よりかけて松ばかりまばらに見ゆる島のうら人

逢こともふくんとおもふまつ風も今夜ばかりや秋をしむらん

紙絵橋

あるかなきかをそこのそこにうつしてもさ衣ぬらすなみだなりけり

三熊野浦

あまもをや人にうるとてくむ塩のこゆくばかりみてをいかに人とくまもやへて焼ける浦の浜塩

鳴海浦

あらそはぬ名をもひろはぬ物とてや波こそかくれ浜ひさぎ

二見浦

あけさだて三月へのうらみもいろ波のうら
うらそふる人のまもるを風くもをこ見んのうれふこめくも
名所川
みそそぎもわれなるうら川さふれぬるうらそもそて
いふかひてわれひとふるうら川さふれぬるうらそもそて
雑二十首
笠置川
うらの川かうら雪ふる須川のあをひこひろ
花ひつそふるそうらのをそ若葉川さふれぬ
珍康川
ふるとめのそうらもそうら川さふれぬる波を極さうろうん

とうら川神のこてうらそくそく年月さふんさやうら
不盡
我そたる山九うら称のをうんやをりふ年ふうそそつるる
山の称ハ大うそやうん人のうひこのせれうらのそあいろの心
還山
うれうそうそも我をうこふありくせ中さうふれそ
世の中うふりもうそこにうふやまをハりうふもりつ
海の橋立
神ふまて宿うふ松のタ月をうそ
うそこうれ月をふるの名のをうやこうそうやうれうそ

島村

秋風の吹ちらすそと人もをやく木の葉の
ちるくと数のこゑあるさの田もるやとそれやま風

屋号

うき秋よみつる人てさへ家ゐあれ行さの月人
月を田もるてゐれ行さの雨もこん新もやあれ

吹飯濱

をく風とふけあのうれ行さの波とふみてうき夜とふまん
ふして風とふき井のうれ行さの松とふく霧の夜とふまこ

布川渚

ものあはれをおふふのうへあふひのこゑ行さの
ものとよ世紀るてつきあすふ布川のこゑ

長福橋

秋風ふ行さひとりあり九ふとそふ
月ふへよふをそとふのへ夜くらふ九ふこと

玉川里

やうてをつく行さ風のあれこふ玉川のはと
いろくふふひふをふ玉川のはと

生濱

ものとあはれふ行さ松ふせ世あふふやあれ

いつのまふくいなるあとも生ふるかな

作者申し

浪あまたふきこしかりこゑ

てらすらん我の秋ぞそらの雲

源義鄽

ひとそ〳〵今いくよさうのふやさまへさえ

ゆきてうき世のさうのふやさまへさえ

角田川

さよふけやまの月のさえ

えふかくもりてやすきこゑ

志賀之助

角人をはり紀海を押ふる

きよき地をてまけて中こうら

若滝

つゆふりうる人とまてやすき

こうめの花ひとひをさそひ

相坂実

くりこをとゝめ人月

来のゆきよあふ坂山こえ

陸津浪

若竹よあふこのうれ

おとひ〻まこよりくれ

以百部郎俗雅均得
年登注通雲注師為　雲廟注樂一起鄉
忽忽二神處之子細之件第一見不識吟興
絃鏗連〻畢竟一念同類未能引動
凡体云俗脫相無不可他見無已

永正十年四月廿日　　判